

ずいそう

建築の空間感覚に思うこと

中村佳弘



大阪阿倍野橋に地下5階地上59階建て、約300mの駅ビルが平成26年春の完成を目指して着工、「平成の通天閣」として市民に親しまれるようになりたいという報道がありました。

こんな高層建築が建ちあがったとき、地上からはどのように見えるものか、今から興味津々です。

話は変わりますが、かつて奈良の法隆寺西院伽藍を調べていて妙なことに気付いたことがあります。平面図によると、中門の位置が境内の中心線から4メートル余りも左に、つまり西の塔側に寄っていたのです。

周知のように法隆寺は中門から境内に入ると左手に五重塔が聳え、右手に金堂が並んで建っています。

元々寺院の塔はインドの仏塔（ストゥーパ）やアジャンター石窟寺院のチャイトヤ堂に見るように、本来は仏舎利を納め、礼拝の中心となる建物です。

日本に伝来した仏教寺院も当初は大阪四天王寺のように、礼拝対象である塔は中門の真正面に建ち、その背後に金堂・講堂が軸線上に配置され、左右対称性も保たれていました。

現存する法隆寺が建てられた白鳳時代には、建築や彫刻において左右対称性を保つという一般原則が後退し、シンメトリーの静的様式からアシンメトリーの動的様式に移っていきます。法隆寺において、塔・金堂というそれまで縦列配置だったものを90度回転し、あえてアシンメトリーの横列にするという大胆な発想に、ダイナミックな時代精神を感じます。

また塔に先立って金堂が建てられたことから、金堂が塔に匹敵する存在になったことが窺われます。

ところが背が高く細長い塔と、塔とは対照的な横に広がりのある金堂が左右に並んだとき、極端なアンバランスは避けたかったようです。

そこで解決策として当時の優れた工人たちは、塔の軒を出来る限り広く張り出すことで塔を太短く見せ、反対に金堂の方は概観上二層にして丈を高くし、両者の形態の差異を少しでも軽減し、バランスの破綻を修整しようとしたのではないかと推測します。

しかしこのように調整しても、五重塔の第一層は幅・奥行き共約14m、二重基壇上の高さ32m近い丈の高い建物です。それとは対照的に金堂は幅約20m

と横に広く、高さは約16mで塔の半分ほどしかありませんから、左右のバランスが取れたとまでは言えないと思います。

それにもかかわらず、法隆寺のこれら堂塔が極めて力強い建築美を持ち、今日なお私たちの心を強く打つことは否定出来ません。匠たちの際立った造形力に頭が下がります。

初めに述べた中門の位置が境内中心軸上にはなく塔側に数メートル（1間分）寄った位置に建てられたのは、塔・金堂間のスペースの中央に門を合わせた結果と思われます。伽藍が完成した当時、回廊は塔と金堂を取り囲み、経蔵と鐘楼の手前2間の所で東西に直結していました。講堂は後世の建築ですから、当時は中門から境内に入ると正面にあるのは五重塔と金堂の間、その向こうは回廊ということになります。当初の法隆寺伽藍配置の根本的と言ってよい難点をここにも指摘出来そうです。門を入った正面には何もないのですから。おそらくこれには匠たちもたいへん困ったのではないかと思います。

ところが実見すると、異常に接近している塔と金堂が同時に視野に飛び込んできます。つまり五重塔と金堂の造形的迫力と両者の一体感によって、正面に何もないという隙間の異常に気付かせないようにする目論みに見事成功したのではないかと思います。

さらに諸堂宇と回廊間のスペースも狭すぎますし、敷地に目いっぱい大きな塔・金堂を建設したのは何故かという疑問が残ります。

こんな疑問を持って見るのであれば、法隆寺の伽藍は奇異にも破綻にも見えません。むしろこれらの建築物は非常に力強く堂々として見る者に迫り、深い感銘を与えます。

CGで細部から全体まであらかじめ完成した姿をどんな視点からも検討することが出来る今の時代にあつては、視覚的困難を事前に発見することはたやすいかも知れません。しかし、造形に対する空間感覚の徹底さ、厳しさは今も昔と変わらないだろうと思います。

—なかむら よしひろ 神戸文化短期大学 服飾学科 教授—
(平成20年4月より神戸ファッション造形大学短期大学部 ファッションデザイン学科と名称が変わります)